

初恋

鏡朱

数多の星々の廻天も終わり

空には落ちる流星のみとなったころ

大気には兄弟の血と

逆行する憐憫のみ彷徨う

降り積もる青銅の鐘の音に

私は辟易していた

太陽の吠える声のみが木霊する

【虚妄】は盲目の男どもに片方の乳房を抉られた

彼女の騙りに火を背負った巨人が死んだからだ

男どもの髪は先のちじれたところから燃え

やがては塵となった

西方からなだれこむ熱を帯びた風に吞まれ

その耳障りな音が息をひそめたとき

彼女は【真実】を殺して皮を剥いだ

逃れたかったのでも

疑われたかったのでも

殺されたかったのでもない

ただ愛してほしかったのだ

【虚妄】が【真実】を騙り近づくと

哲学者は言葉なく

撫でる柔らかな春風よりもそつと

ただ彼女を抱きしめ

幾度の逢瀬を経たあとかのような

深く熱い

息はうだり流れを淀ませ

舌は蛇となり貪るような

そんな口づけを突き付けた

きつとこのときだろう

太陽が一瞥をくれたのは

月は彼の虹彩だと忘れてはならない

五番目に燃やされたのは【女】だった

彼女はときに

女神であり

偶像であり

famme fatale であつた

彼女の瞳は質の悪い鏡

見たものは際限なく驕つた

四肢はやけに透き通り

ひとたび触れられたのなら

言の葉を失ってしまう

呪われた義眼に魂を喰われ

辜丸に脳を敷き詰めた愚かな獣どもの手綱を取り

星を思うままに振り回した

あるときは太陽に股を開き

【死】と【欲望】と【虚妄】と【盗賊】を産んだこともあつた

ああなんたる不遜か

私は決して彼女を許すことなどできない

太陽はまず彼女を炉に放り込んだ

ガラス質の肌が少し溶け

黄金の輪郭が歪み始めたころ

炉は鏡となり

その醜態を彼女に吐露した

太陽は彼女の滑らかな嬌声に身を震わせ

彼女の子宮を卵巣から半世紀ほどかけて燃やす

一際艶やかなアルトサクソフォンの響きに

【死】と【男】はさびた鉛の突起を震わせ

その灰を求めて太陽に懇願する

【男】は仰々しい態度で礼賛の歌を垂れ流し

太陽をたばかった

灰はただ厳かに剣を磨くためにある

七十二番目に燃やされたのは【知識】だった

彼は病を癒した

ただ癒した

医学で癒した

数学で癒した

万有引力で癒した

核分裂で癒した

病が癒える度に人は自らの無知を知った

知ることは酒だった

しかし不幸の汽笛が耳から離れなくなったのだ

無知なる幸福は腐敗の匂いを漂わせ

人々の器は光よりも速く浸食した

私は彼を愛していた

人間は不幸でなくてはならない

太陽は彼の四肢を引きちぎり薪にくべた

そして問うた

なぜこれは燃えているのかと

なぜ燃えなければならなかったのかと

【知識】は科学する

そのたくましい脳で学問する

回路に艶やかな鮮血が注がれ

寄せては返す波のように

勢力を増し真理を希求する

歴史上類を見ない偉業に城壁は悲鳴を上げた

過剰な熱で溶けて爛れた

彼のことだ

垂らした血も運河となり

また星雲の淀みを反響させるのだろう

三千七百八十二番目に燃やされたのは【男】だった

彼は騒ぐのが好きだった

【弱さ】を舐って遊んだ

指を輪切りにして

そのたびに塩に浸した鑊で肉を削った

悲鳴が彼の嗜好品だった

ゴールドのネックレスを三重に

シルバーのネックレスをさらに四重にしていたので

頸椎が変形してテトラポットのようなだ

嘲笑が洪水をおこし

天井を翻して大雨を降らせたこともあった

子供の涙を水銀に変えて殺した

溺れた老輩の足に楔を突き立てて殺した

女は髪を脛に詰め込んで背骨をひん曲げて殺した

先に皮がはがれて死ぬのもいた

私は彼を嘲った

これほど哀れな人形劇

他では見られまい

太陽は彼の身にまとう装飾を引きはがした

なんたることか

肥え太った蛆虫が筋肉となり這う

いつからか彼は空洞だった

ペニス^{ペニス}は薄汚れた外套がその身を離さず

ナナフシの群体とさほど違いはない

彼は鏡をもっていなかった

湯を沸かす薪も持っていなかった

私は初めて太陽にお声がけした

灰も残してはなりませぬ

太陽はコロナを滾らせて応えて下さる

プロミネンスとフレアで交互に燃やした

灰の溶けたその空気さえ闇に消えた

明日燃えるのは私だろう

ただ銀の風が郷愁を誘う